

# ジャパニーズ・アメリカ

— 移民文学・出版文化・収容所

日比嘉高著 (新曜社・4536円)

「俺は古本屋を歩く／そして  
古雑誌や古書籍を購ふ／其度に  
エキサイトする。」

これは一九二一(大正十)年

年に、清水夏晨という詩人が私  
家版で出した詩集『永遠と無窮』  
に収めた一篇「古本屋を歩く」

の歌い出しである。それから百  
年近く経った今のわたしたち  
は、名前を聞いたことのない詩  
人のこの一節を読んで、どんな  
ことを思うだろうか。これを書  
いたのはいわゆる古本マニア  
で、今でもいそうな人間、つまりはわたしたちに似た人だと思  
うかもしれない。しかし、「エ  
キサイトする」という言葉の使  
い方に、妙なひつかかりをおぼ

えるはずだ。その疑問は、続く  
一節を読むと氷解する。

「何故に？／俺は知らない。  
／然し寂しい移民地で——此  
の外国で——多くの同胞が／酒  
や女に其本能の懊惱をいやす様

存在を、これまでわたしたちは  
ほとんど意識したことがなかっ  
たのではないか。

本書『ジャパニーズ・アメリ  
カ』が豊富な資料や丹念な読解  
とともに描き出しているのは、  
渡米熱がピークに達する一九〇

年以前後に始まり、第二次大戦  
中に日系アメリカ移民が強制収  
容所で生活することを余儀なく  
された時期へと至る、日系アメ  
リカ移民が日本語で書いた文学  
作品の全貌と、そのような嘗み  
型性の背景に置き直し、男性  
がとりわけ興味深い。

北米日系移民文学が指示示す  
のは、日本文学とアメリカ文学、  
あるいは日本人とアメリカ人と  
いった、さまざまな問題がせめ  
ぎ合う場であり、著者の言葉を  
借りれば「ハ境域の文学」であ  
る。歴史のはざまから立ち現  
れたようなそのハ境域の姿と  
広がりに、わたしそれこそ「エ  
キサイト」させられたし、グロ  
ーバル化が叫ばれるかたわらで  
ナショナリズム的言説が幅を利  
かせる今日のような時代にこそ、  
本書は意義を持つのではないかとい  
う夢想に誘われた。

## 北米日系移民が生んだ「境域の文学」

に古本屋を歩く時の俺のエキ  
サイトは、俺をよろこばせ亦悲  
しませるのだ。」

詩人はべつに古本マニアでは  
ない。彼は大勢の日本人移民と  
して、北米に渡った。そして、  
英語が話され書かれている異郷

有島武郎の「或る女のグリンプ  
ス」も、主人公田鶴子の人物造  
形を、いわゆる「写真花嫁」と  
して渡米した多くの女性たちが  
移民先でどのような視線にさら  
されたかという、「時代的な類  
型性」の背景に置き直し、男性  
の移民史に対して別の視座を提  
供する可能性を持つ作品として

や書籍をむさぼるように読み、盤である。  
ここで取り上げられている作  
品には、わたしたちにとってな  
どの深いものもあるが、たと  
えば永井荷風の『あめりか物語』  
を取り上げた章では、日本人作  
家永井荷風による異文化観察の  
記録としてではなく、アメリカ  
に定住することも視野の中に入  
っていた、潜在的移民の文士志  
望者永井壯吉による、将来の行  
方も定かではない彷彿が映し出  
されたものとして論じられる。

北米日系移民文学が指示示す  
のは、日本文学とアメリカ文学、  
あるいは日本人とアメリカ人と  
いった、さまざまな問題がせめ  
ぎ合う場であり、著者の言葉を  
借りれば「ハ境域の文学」であ  
る。歴史のはざまから立ち現  
れたようなそのハ境域の姿と  
広がりに、わたしそれこそ「エ  
キサイト」させられたし、グロ  
ーバル化が叫ばれるかたわらで  
ナショナリズム的言説が幅を利  
かせる今日のような時代にこそ、  
本書は意義を持つのではないかとい  
う夢想に誘われた。

したがまつたく知らないよう  
な作品も多数紹介されていて、  
死んだはずの漱石の「猫」が生  
き返り、汽船に乗り込んでサン  
フランシスコに渡り、そこで日  
本人移民の生活ぶりを見聞した  
という荒唐無稽な設定の、保坂  
帰一『吾輩の見たる亞米利加』  
がとりわけ興味深い。